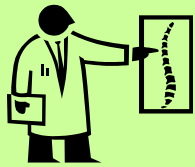


# 伊藤外科ニュース



## 106号

2013.05 発行

寒暖の差の激しい今年ですが、それでも新緑の美しい季節を迎えました。

落葉樹と常緑樹の新芽の色合いの違いやカエデの新芽は秋の時期のように赤い事など、この時期には様々な発見をします。しかし、数年前まで、伊藤外科の軒下に巣作りをしていた燕の可愛らしい姿は、今の西新宿の環境ではもう見る事ができません。

また、今年はやはり寒かった為でしょうか、ゴールデンウィークの期間に楽しみにしていた信州の桜見物では華やかさが例年ほどありませんでした。

### 胃カメラ検査今昔

さて、今回は胃カメラ検査(上部消化管内視鏡検査)について記述します。

伊藤外科では、一日に原則一人ずつ胃カメラ検査を行っています。

私が初めて胃カメラ検査を行ったのは昭和56年の夏でした。当時は、医師になって半年の新米が先輩たちに見守られながら検査を行っていました。この頃の内視鏡は、直径が13ミリ程度と太くて硬いため患者さんの負担が大きかったものです。先輩医師は、まず私自身が胃カメラの体験者となるように教育してくれましたので、検査の辛さを理解する事ができました。

卒業後3年すると一人で午前中に10名から15名の患者さんの検査を行うようになります。

当時の内視鏡は、今のような電子スコープではなく視野も暗いので見落としがないように非常に緊張したものです。手際の良いスタッフに助けられながら約一年間毎日が検査担当でした。この間にいわゆる検査のコツを覚えたような気がします。

一方、今の胃カメラは直径6ミリ程度で柔らかいので、患者さんは楽に検査を受けられるようになったと思います。病気の種類としては、以前は胃潰瘍に代表されるように胃の病気が多かったのですが、最近は食道の病気が増えています。やはり油性の食事を摂る習慣が関係しているようです。

日本は、技術の国ですから内視鏡の機材の進歩は私も驚くほどです。特に、今までは凹凸や色調の変化からガンなどの病変を見つけていたのですが、特殊な色素を散布する方法や機械自体が画像の波長を特殊処理し微小な病気をキャッチできる時代となっています。

また、胃カメラによる早期ガン治療の発達も素晴らしく、多くの患者さんが開腹手術を受けず済んでいます。伊藤外科では内視鏡治療は行っていませんので、新宿区内の大学病院の治療の名手をご紹介します。

新年度になり区民健診とガン検診が始まりました。新宿区では今年度から職場や学校で検診を受けていない19歳以上の区民も対象としています。体調に不安のある方、貧血を指摘されている女性、最近検査を受けていない方などご相談下さい。

医療機関を受診する際に必要な健康診査票は新宿区役所の健康推進課健診係(TEL5273-4207)に御自身で連絡すると送られてきます。

梅雨までの清々しいこの時期を皆さん元気でお過ごしください。



伊藤外科 HP <http://www11.ocn.ne.jp/~itoh-hp>

(バックナンバーはHPにて公開中です)



# マンガ日本の歴史

著者：石ノ森章太郎

ワタクシが子どもだった昭和 40～50 年代の頃、出版の世界では事典などの大型本やシリーズ本の全盛期だったらしい。高度経済成長を経て、暮らしが安定してきた頃である。戦中・戦後、どんなに読みたくてもなかなか本が手に入らない時代を経験した世代が、知の欲求と、ある意味の豊かさの象徴として、こうしたシリーズ本を買い求めたのだろう。

三弓の本棚に今も、『日本の歴史』シリーズが残っている。これはワタクシが子どもの頃からあった。が、ワタクシは一度もそのページを開くことなく、大人になった。今から思えば、実にもつたいないことをしたものである。

そしてずいぶん大人になってから、自分でも『日本の歴史』シリーズを買った。ただし、マンガ『日本の歴史』（中公文庫）である。著者は「仮面ライダー」の生みの親としても知られる漫画家・石ノ森章太郎氏。第 1 巻の「秦・漢帝国と稲作を始める倭人」から第 55 巻の「高度成長時代」までを 7 年の歳月を費やして完成したらしい。各巻に歴史学者の監修者が付いてはいるが、石ノ森氏の歴史に対する造詣の深さがなければ為し得ない偉業である。

そもそもなぜ大の大人になってからマンガで日本史を読もうと思ったかというのと、とにかく歴史音痴だったから。それでも、年を重ねてくると、自分が知りたいことを学んでいくためには、日本人としてその背景にある「歴史」を無視することはできなくなり、とにかく通史だけは頭にたたき込みたいと思った。その手始めとして、活字だけより絵に手助けしてもらおうと考えたのだ。

この策は案外的を得ていたようで、その後、あらためて古代史を勉強したり、文献を読み進めることができるようになった。でも、マンガ『日本の歴史』は室町時代に入るまでの 20 巻までをくり返し読むばかりで、残りの 35 巻はまだ一度もページを開けずにいる。

中公文庫はもうひとつ、マンガ『日本の古典』というシリーズも出している。この中で私の愛読書となっている『古事記』も石ノ森氏が描いている。石ノ森氏がもうひとつすごいのは、描き方がニュートラルだということだと思う。歴史にしる古典にしる、それを書く（描く）人の「色」というものが往々にして入るものである。『古事記』は昨年、誕生から 1300 年ということで何冊か漫画化されたもの世に出たが、描き手の色がつき過ぎていて、正直、私の体質には合わなかった。『日本の歴史』にしる『古事記』にしる、石ノ森氏の作品は、そこから先、自分なりにその世界と出合っていくことをまったく妨げないどころか、その分野に知を広げる礎になってくれると、勝手に確信している。

ところで、日本の古典もろくすっぽ読まずに大人になったので、最近、そちらのほうも気になっている。マンガ『日本の古典』には「源氏物語」「今昔物語」「吾妻鏡」「徒然草」「葉隠」などがある。描き手はすべて別々の漫画家さん。描き手との相性が合うかどうかで、物語の印象が変わるからなあ。ここは難しいところである。